

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成26年7月1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所 属 部 局 経 済 学 研 究 科

職 名 教 授

氏 名 塩 地 洋

助 成 の 種 類	平成26年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 国際会議開催助成		
事 業 内 容	GERPISA第22回国際コロキウム		
開 催 期 間	平成26年6月4日 ～ 平成26年6月6日		
開 催 場 所	京都大学百周年時計台記念館 国際ホールおよび会議室		
参 加 者	総 数	150名	内 訳
			海外からの参加者100名 日本国内からの参加者50名
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有(プログラム)		
会 計 報 告	事業に要した経費総額	(飲食・宴会経費を除いた額)	1,143,411 円
	うち当財団からの助成額		1,000,000 円
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)	なし
	経 費 の 内 訳 と 助 成 金 の 使 途 に つ い て		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	会場費(国際ホール他)	405,000	405,000
	キーノートスピーカー旅費	300,000	300,000
	アルバイト費用	290,000	290,000
	ネット接続アシスタント	13,716	5,000
	事務局員宿泊費	9,000	
工場見学バス代, イヤーホンレンタル	125,695		
	1,143,411	1,000,000	

成果の概要/塩地 洋

第 22 回ジェルピザ国際コロキウムが 2014 年 6 月 4 日から 6 日の三日間にわたり京都大学百年時計台記念館国際ホールおよび会議室において開催された。

この国際学会は自動車産業研究を主たる領域とする研究者の集まりで、1990 年代前半に欧州において創設され、今年で 21 回目を迎えている。今年も欧州を中心に、北米、中南米、アジア(日本、韓国、中国)等の世界の約 30 カ国から約 150 名が参加した。今回の国際コロキウムのメインテーマ「新しい均衡にむけた自動車産業の新旧のスペース」のもとに、2 回の全体セッションと 30 のパラレルセッションおよび懇親会と産業施設視察がもたれ、計 100 名の研究者が報告をおこなった。

まず 6 月 4 日午前には全体セッションが開催され、今回の国際コロキウムのメインテーマを構成するアジア自動車産業について、5 名のキーノートスピーカーが登壇した。それは、東京大学・藤本教授「自動車産業の進化」、トヨタ自動車吉貴常務役員「自動車の将来」、日本自動車工業会シンガポール事務所・岡所長「アセアンにおける自動車産業」、日本自動車部品工業会国際部・中木部長「アジアにおける日本部品メーカー」、京都大学・塩地「日本、韓国、中国の自動車産業の国際競争力比較」であった。

6 月 4 日午後からは、パラレルセッションが始まり、5 日と 6 日まで、計 30 のセッションが開催され、90 名が報告した。パラレルセッションは今回の全体テーマである「新しい均衡にむけた自動車産業の新旧のスペース」の下に設定された六つのサブテーマ(①自動車産業における新しい機会—新車と中古車、②新技術とモビリティ—グローバルレベルでの傾向と政策、産業、③新製品開発にむけて分岐点に立つ自動車メーカー、④プレッシャーを受けているサプライチェーン—国際化と分業の進化、⑤産業政策—アジア、アメリカ、欧州、⑥雇用関係の動向)ごとにセッションが配置され、集中的な討論がおこなわれた。

6 月 6 日の午後には全体セッションが開催され、「欧州と日本の自動車産業—F T A と E P A 交渉」というテーマで議論がおこなわれた。キーノートスピーカーとして欧州委員会のサーネット・チーフエコノミストが「自動車産業に対する影響の調査」という報告をおこない、それに基づいて、欧州自動車工業会東京事務所のミリングトン所長、E U 日本センターのジョラ所長、欧州連合の日本事務所メルブイ所長、日本自動車工業会国際部の矢野部長、元経済産業省局長の塚本氏が加わってパネルディスカッションがおこなわれた。なおこの全体セッションは日欧産業協力センターからの協力を得た。

成果をまとめると、第一に、初めて欧州以外の地で開催されたことであり、その名誉を京都大学は得たことである。すなわち従来は、ジェルピザは隔年でパリ(奇数年)とフランス以外の欧州の都市(偶数年)で交互に開催されてきた経緯があり、2014 年はフランス以外の欧州の都市の順番であったが、京都大学からの積極的な働きかけにより、欧州以外で初めて開催することとなった。ブラジル・サンパウロや中国・上海などを推す声もあったが、京都大学での開催となった。これはたいへん名誉なことである。

第二に、今日焦眉の課題となっている自動車めぐる環境問題や交通渋滞問題、自動車生産における労働問題、自動車のリサイクル問題などについて集中的に議論がなされ、学術上の成果が得

られたことである。

なお、今回の国際会議のメインテーマおよびサブテーマとの直接的な関連性をもった産業施設視察がおこなわれ、約 50 名が参加した。6 月 3 日午前には「トヨタオートオークション近畿」を視察した。トヨタオークション近畿は中古車のオークション会場であり、年間に約 20～30 万台の中古車お取引がおこなわれている。中古車オークションは、自動車の生産-流通-廃車/解体プロセスにおいて重要な位置を締めるプロセスである。日本の中古車オークションは世界先端の POS(ポス)と呼ばれる電子装置によって競りがおこなわれている。欧米からの参加者にとって大変興味深い産業施設視察となった。

6 月 3 日午後には、自動車の解体とリサイクル部品/資材回収をおこなっている巖株式会社の解体工場とシュレッダー工場を視察した。こうした解体工場とリサイクル部品/資材回収施設は、先に述べた自動車の生産-流通-廃車/解体プロセスの最終の位置を占めるものであり、きわめて重要性が高い。もしこうした解体工場/リサイクル工場によって処理がなされなければ放置や不法解体によって汚染が進む。欧米に比較しても日本の解体/リサイクルプロセスは進んでおり、欧米からの参加者から注目を集めた。

最後になりましたが、京都大学教育研究新興財団から財政面で多大な支援をいただいたことに感謝を表明させていただきます。

コロキウム事務局
京都大学経済学研究科
教授 塩地洋